

今日は降臨節第3主日、洗礼者ヨハネのローソクに火を燈す日曜日です。先週の福音書でも読みましたが、イエス様に先立って、この世に遣わされたのは、イエス様より半年前に生まれた洗礼者の、ヨハネでした。

これからの1年、私たちが読むことになるマルコによる福音書では、1章14～15節で、『ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」と言われた。』とあります。

つまり、ヨハネの活動が終わってから、イエス様が伝道をはじめたことになっています。ところが、今日のヨハネによる福音書では、洗礼者ヨハネとイエス様が張り合って、別の所で洗礼を行っているように描かれています。

この福音書の1章では、最初洗礼者ヨハネの弟子たった二人の人が、イエス様のことを洗礼者ヨハネが「見よ、神の小羊だ」と言ったので、イエス様に付いて行って、最初の弟子になったことが書かれています。

どうも、歴史的には、ヨハネの活動が終わってから、イエス様が伝道活動を始められた、というのが正しいようです。しかし、福音書の中で、一番最後に書かれた、ヨハネによる福音書ができた頃、まだ、洗礼者ヨハネを救い主と考えているグループもあって、イエス様を救い主と信じる教会との間で争いがあったために、この福音書の著者は、イエス様が、洗礼者ヨハネよりも優れた者であることを、福音書に二つのグループを登場させることで、はっきりさせようとしたのではないか、と思われま

しかし、私たちは、劣っている洗礼者ヨハネの生き方から、今日は学びたいと思います。

今日の福音書の最後の方、29節から読みますと、

「花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている。あの方は栄え、わたしは衰えねばならない。」

「自分は、花婿ではなく、介添え人に過ぎない。言わば、脇役だ。しかし、脇役としての喜びに満たされ、舞台の中心から去ることを良しとしている。」ということでしょう。

私たちの大半は、この社会の中の主役を演じることはないでしょう。脇役、というより、居ても居なくても、あまり全体の流れとは関係ない。そんなわたしたち一人ひとりの生活ですが、それに意味があるのかどうか、というのが問題になるのではないのでしょうか。

私は、「なぜ私だけが苦しむのか」という本を紹介したことがあります。それを書いたユダヤ教のラビ（先生）が、「天国に行くための8つの知恵」という本も書いていて、おもしろく読みました。この本は最近「人生の8つの鍵」というタイトルになって、ヨベル社から同じ内容で出版されています。

旧約聖書に出てくる、ヤコブという人物の成長を通して、私たちの生き方、考え方を見直している本ですが、その本の7章には「脇役が最高の主役」という見出しの、おもしろい文章が載っています。

ヤコブには12人の息子がいますが、下から2番目のヨセフは、兄たちの嫉妬のため、エジプトに売られてしまいます。ところが、その後エジプトの王様に見込まれて出世し、やがて、イスラエルに飢饉が起こると、父のヤコブや兄たちをみんなエジプトに招いて、そこで何百年もこのイスラエル民族が生活することになったのです。

ところが、このヨセフがエジプトへ売られる出来事には、ひとりの無名の男が関わっているのです。

創世記の37章を一度見ていただきたいのですが、シケムというところで羊の世話をし、家を離れているヨセフの兄たちのことを心配し、父ヤコブは、ヨセフの様子を見に行かせます。ヨセフはシケムで兄たちを探して野原をさまよっていると、一人の男に出会います。その人は「何を探しているのかね。」と問うと「兄たちを探しているのです。どこで羊の群れを飼っているか教えてください。」とヨセフは言います。するとこの人は、「もうここをたってしまった。ドタンへ行こう、と言っていたのを聞いたが。」と答えます。

それだけの話です。そして、ヨセフはドタンへ行って、兄たちを見つけると、兄たちはヨセフを殺そうと考えるのですが、長男ルベンはその命を助けようとして、結局エジプトへ売ることになったのです。

この話にはもう少し解説がいります。兄たちはどうしてヨセフを殺そうとしたのか、という問題です。いつもヨセフが夢の話をして、兄たちがねたんだ、と思われがちですが、それだけでは、殺す所まではいかないだろう、とユダヤ教のラビは考えます。問題は、羊を飼っていたシケムという場所と、兄たちがそこを立って行った、ドタンの町の問題だと言うのです。ドタンはシケムのような牧草地ではなく、大きな町であって、その町で遊びほうけて、羊の世話を怠っていたのをヨセフに見つかったために、彼を奴隷に売り飛ばし、口をふさごうとしたんだ、という解釈があるそうです。

それで、もし、ヨセフが兄たちを探しに出かけた時、この人に会わなかったら、どうでしょう。ヨセフは途中で諦めて、何か言い訳でも見つけて父のヤコブの所へ帰ったのではないか。そうすれば、エジプトへ売り飛ばされることもなかったし、ヤコブの一家がエジプトへ住むこともない。だから、モーセがイスラエルの人々を引き連れて、エジプトを脱出することもなかった、と思えば、この名も無い男の人が、ヨセフに会って、兄たちの居場所を教えたことが、いかに聖書の歴史に大切な役割を果たしたか、わかるだろうと思います。

わたしたちが普段、何気なく生活していることは、実は重要な意味のある仕事なんだ、ということ、私たちは自信を持って生きることが大切なのではないか。

このユダヤ教の先生は、ある心理学者の言葉を引用して、「人は人生の最終章に近づくと萎靡性（いびせい）体質になるか、生殖性体質になるかの、どちらかだ、と説いているというのです。

「萎靡性」とは、身体が萎えて何もしなくなる状態のこと。「生殖性」とは、次の世代の若者を育て、指導しようという欲求、のこと。人間が年を取ったら、そのどちらかに傾くというわけです。

萎靡性に傾くと、自分のことしか考えなくなってしまう、生殖性に向かえば、次世代に託す世界にするには何ができるだろうかと考える前向きな生き方をする、というわけです。そして、この前向きな生殖性の生き方が健康的であることは、言うまでもありません。自分の殻に閉じこもることなく、外に出れば、自分の役割が自ずと見えてくることもまちがいないだろうということです。

洗礼者ヨハネは、自分の後に現れたイエス様に託す、この生殖性の生き方だったので、喜んで表舞台から去ることができたわけでしょう。

この「脇役が最高の主役」という章を閉じるに当たって、ユダヤ教の先生はこんな文章を書いています。

私たちが神にとって大切な存在であると知ることで疑問や不安は吹き飛んでしまいます。世の中の役に立つためにガンの治療法を発見する必要はありません。神の目に留まるような偉大な小説を書く必要はありません。ただ他者と人生を共にし、萎靡性よりも生殖性を選べばいいのです。「偉大なことを成し遂げられるのはごく限られた人だけですが、でも小さいことなら大きな愛を持ってすれば誰にでも可能です」とマザーテレサが言ったように、あなたは今進行中の大きなドラマの脇役です。ドラマに脇役として立ち会えることは限りなく光栄なことです。

私たちは、脇役に徹して、キリストを指し示した洗礼者ヨハネにならい、歩むものでありたいと思います。